

『反戦の手紙』序文、校正前原稿より

(ティツィアーノ・テルツァーニ原作、飯田亮介訳、2004年WAVE出版)

わが日本の友よ、

人生におこるすべては、偶然ではない。そしてもちろん、あなたが私のこの小さな本を手にとったのも、いまこうして私の言葉をよんでいるのも偶然ではない。そこで頼みがある。読みつづけてくれ、すくなくともあと二行は。なぜならそこにあるものは、私の最期の言葉たちの一部であり、それが誠実な言葉であることはまちがいないのだから。あなたの富士山とおなじ、聖なるヒマラヤの山をながめながら、末期ガンをかかえ、もはや世間のあれこれへの個人的な関心という重荷をもたぬ者の軽快な心で、わたしはこれを書いている。だが私にも、人としての関心がひとつだけのこっている。この恐るべき驚異、私たちの種族「人類」の運命だ。

だから、わが読者よ、あなたに頼みがある。われわれを滅ぼしつつある暴力の蛮行から人類を救うために、私たちの一人ひとりが、私たちにできる範囲で、私たちに残された時間のなかで何かをしよう。

あとのページにつづく八通の「反戦の手紙」をわたしは二年前に書いた。その内容が今もいかに通用することか、そして、一つの恐怖のあとにはまた一つの恐怖が続き、そのあとには更なる恐怖が続くという私の予想がどれだけ正確なものであったのかを知ることは、慰めになるどころか、どうか信じてくれ、むしろ絶望的なことなのだ。9・11テロに続くアフガニスタン戦争にイラクの戦争。バリ島の爆弾テロに続く、モロッコ、サウジアラビア、トルコの爆弾テロ。あすはどこだろう？ロンドンか、ローマか、それとも銀座だろうか？私たちの運命が、二年前よりも、さらに大きな危険にさらされているような気がしてならない。

世界全体は今、9・11テロ直後よりもさらに危機的な状況にあり、われわれの文明的共存は、日ごとにその文明的性格を失いつつある。わたしたちはテロリズムに対し文明を

守ると言い訳で、文明そのものを破壊しつつあるのだ。誰もが知っているように、文明とは、いずれも今のところ捨て置かれている諸原則や諸法律、各国際協定でなりたつものである。グアンタナモ¹はこの現象の最も下劣な例である。国連がのけ者にされているのはこの傾向の不安な指標といえる。

多くの国々がその憲法に導入した文明の偉大なるあかし、紛争を解決する手段としての戦争の放棄は、いまや「予防戦争」という野蛮な新しい原則にその座を奪われてしまった。

つまり日本の友よ、ここで問われているのは、イラクに自衛隊を派遣するかしらないか、派遣するならば今か後か、100人送るか1000人送るか、それとも2000人かなどということではないのだ。そのような問いは、国民のだれもを納得させて再当選をはたすためにアクロバットと妥協をつづけざるをえない政治家たちのジレンマにすぎない。そこには全人類的な価値への関心、正しいことや倫理的なことへの考慮が完全に欠落している。むしろ私とあなたにとって問題なのは、暴力と戦争はなにも解決しないということ、戦争の味と臭いのするあらゆることに対して私たちは、たとえそれが「自衛行為」とか「人道的作戦」などというふうの説明される時も、もちうる力のすべてを以て反対しなければならないということ、どのような状況にあっても自分の意志できっぱりと決意することなのだ。

まさに他でもない日本人であればこそ、あなたには、世界の他のどこの市民よりも大きな声で「Noooo!」とさげぶ資格があるのだ。(p2)

二十年前、「反革命罪」で中国共産党政府に訴えられ同国から追放されたわたしに、当時わたしを雇っていたデル・シュピーゲル誌は、つぎはどの国で特派員をしたいかとたずねてきた。いくつもの選択肢があったが、わたしは迷わなかった。あなたの国、日本にゆくことに決めたのだ。それには明確な理由があった。想像しうる恐怖の最たるもの、原子爆弾のホロコーストを経験した国民のあいだで暮らしてみたかったのだ。あの経験があな

¹ 訳注・「グアンタナモ」キューバのアメリカ軍基地。アフガニスタンから連行された多くのタリバーン捕虜が留置される捕虜収容施設がある。アメリカ軍の同施設とタリバーン捕虜の扱いは人権団体などから多くの批判を受けている。

たの国の文化にどのような新しい平和文化の種をまくことになったか、そして、命に対するあの侮辱行為を二度と繰り返さぬために、人類があなたたち日本人から何を学ぶことができるかを私は知りたいと思ったのだった。

わたしは日本に五年間滞在した。ヒロシマとナガサキになんども通い、ヒバクシャたちと語りあい、子供のころ「黒い雨」を浴びた一人のすばらしい建築家という友もえた。だが最後には私はひどく失望していた。それは日本という国が、あの経験をひとつの教訓に昇華させるために、そして世界情勢に対し独自の姿勢をうちだすために、余りにわずかなことしかしていなかったからだった。あるときヒロシマでわたしが書いた記事はつぎのように始まっていた。『そのの鳩たちまで、訪れる平和主義者たちの与える議論とエサに飽き飽きしてしまっている。』

だが、何をするにも遅すぎるということはない。それにこの「反テロリズムのグローバル戦争」は、あらゆることを改めて考え直し、あともどりをするのに最適なひとつの機会であり、ヒロシマ・ナガサキの歴史をすべては遠い過去のことであると偽り、あたかも何も起きはしなかったかの様なふりをするかわりに、それを思い出すのに最適な機会なのだ。ひょっとすると、これが最後のチャンスかもしれない。

あなたたちを爆撃してから平和憲法を押し付けたうえで、自分の都合しだいで、今はそれを改めるよう仕向けてくる者たちに、この五十年間たとえ何を言い聞かせられてきたにせよ、あなたたち日本人は、世界の他のどんな民族もいまだ味わったことのない体験を自分の肌で知ったことがあるのだ。しかもそこで犠牲となったのは無辜の一般市民である。くりかえす、一般市民である！。だから今あなたたちには、政治家たちの偽善者ぶった日和見主義的な声ではなく、自分の声、心からの声をあげるという倫理的な権利がある。それが義務でもある。心は知っている。心は平和をもとめ、非暴力をもとめている。手の届かない高度をゆく爆撃機のキャビンで快適に腰掛けている誰か、またはコンピューターの前にいる誰かによって、ふたたび、幾千・幾万の子供たちが数秒で灰にされてしまうことなど、心はのぞんでいない。その子供たちが日本人であろうとなかろうと。

だれが誤っていて、だれが正しいのかが問題なのではない（あの当時だれが誤っていて、

正しかったかでもない)。そうではなく、正しいのは自分だと思いこみ、間違っていると決めつけた相手を殺してしまう者ができることを、いま避けることが大切なのだ。イスラエル人とパレスチナ人、いったいどっちが間違っていて、どちらが正しい？どちらでもなく、実はその双方でもあるのだ。ものごとの観点を变えることが大切だ。人類をひとつにまとめるものを正しいと見なし、分断するあらゆるものを誤りと見なすべきなのだ。

イスラエル問題の解決策？全ユダヤ人がきっぱりとヒトラーを許し、ドイツ人を許し、彼らの味わった苦しみは史上唯一にして最大のものであったと考えることをやめる必要がある。イスラエル政府がパレスチナの一般市民にあたえる苦しみは、それと同じくらいに大きなものであり、それゆえ、多くのパレスチナの若者を自爆テロに走らせることになるのだ。当然のことながら彼らにしても、世界の若者たちと同じく、できるものならば生きていたいはずだ。

自分の考え方が「ポリティカリー・コレクト（＝政治的に適當）」であるかどうかという恐れをもつことなく、ものごとの偽善的な見方をやめなければならない。イスラエルの現政権がナチス・ドイツ的な政策を続けていると口に出すことは、反ユダヤ主義者であるということではないのだ。おなじことを多くのイスラエル人も言っている。（p 3）北朝鮮やイランのような国々の大量破壊兵器開発を望まないのはともかく、自分は新世代の核兵器（誰に対して使用するというのか？）の研究開発の許可を議会で通過させたアメリカ合衆国のブッシュ政権こそが、人類にとって今日最大の危険な存在であると口に出すことは、反米主義者であるということにはならない。じつに多くの、絶望した米国民たちがおなじ発言をしているのだ。

国際連合が取るに足らない存在になった？良からう。今こそ、国連組織全体の建て直しが必要であるとの議論がなされるべき時だ。五十年前の戦争の勝者たちだけが世界の運命に口出しできるなどということ自体、ナンセンスなのだから。世界がリッチな日本に毎度毎度あれこれ資金援助を求めてくるならば（今回はアメリカのイラク「復興」——もしくは占領か？——に数十億の支援をすることだが）、世界の国々は日本が安全保障理事会のポストを得ることを認めるべきなのだ。そしてインドかブラジルも理事国であるべきだし、アフリカの代表もいくらかそれに加わるべきだろう。

私たちは過去のあらゆる先入観をすてさり、あらたな方法で考えてみななければいけない。他人がつくったテロリズムの定義、自由・民主主義・ゆたかさ・発展の定義を受け入れてはならない。われわれにさらなる兵器の備蓄を必要とさせる「敵」などいないと考えはじめる必要があるのだ。そのような兵器は巡り巡って私たちの頭上に落ちてくることになる。

平和なくらしを求めることは馬鹿げたことではない。大切なのはそれを強く希求すること、そして、そのための働きかけを始めることなのだ。それも、いますぐに。

その意味であなたの日本は、わたしがその土地の出身であることを誇りに思う「老いたヨーロッパ」とおなじく、果たすべき重大な役割をになっている。わたしの民族の歴史は、わが日本の読者よ、あなたの民族の歴史とおなじく、勝ち負け両方のかずかずの戦い、無数の死者、徹底的に破壊された無数の町からなる長い物語だ。戦争の恐怖はあなたのDNAのなかにも、私のDNAのなかにもある。そこでだ、わたしたちのこの遺伝的経験を、幸運なことにその恐怖をいままで味わったことのない人々のために役立ててやろうではないか。アメリカ人たちがその自殺行為を免れることができるように、みんなで助けてやろう。彼らの自殺行為は結局、私たちをも自殺に追い込むことになるものだ。

勇気をださなければならない。「友情」や「恩返し」のために殺人者になってはならないし、その共犯者になることすらあってはならない。これは群れの心理なのだ。少年たちの集団がひとりの少女を殺した場合、つまりそれが個人に対する殺人である場合、だれもがこの心理を非難する。だが、その集団が軍服を身に付け、無数の人々を殺す時、おなじ心理が受け入れられてしまうのだ。

NOだ。あらゆる暴力的なことに参加するのをやめよう。私たちにはそうするだけの正当な理由がある。ニュルンベルク裁判²同様、東京裁判³の裁判官たちは、単に命令に従っ

² 訳注・「ニュルンベルグ裁判」第二次大戦後、戦勝国のアメリカ・イギリス・フランス・ソ連がドイツの戦争指導者を裁くためにドイツ・ニュルンベルグで行った国際軍事裁判。

³ 訳注・「東京裁判」正式名称は「極東国際軍事裁判」。第二次大戦後、日本の戦争指導者を裁くため東京で行われた国際軍事裁判。裁判官には、連合国側の十一名がマッカーサー

ただけだという被告人たちの弁明を受け入れなかった。では私たちもまず、自分の心の命じるもの以外はあらゆる命令を拒否しようではないか。

イタリアでこの本が出版されたとき（訳注・二〇〇二年二月）、平和について語り合うために私を招待する者があればどこでも行こうとわたしは宣言した。結果、そこには非暴力のための巡礼の旅のようなものが生まれ、それはわたしを勇気づける体験となった。学校や劇場、市町村議会の会議室などで語り、町から町へと行くうちに、わたしは数限りない人々と出会うことになり、特に若者たち、わたしと同じように考え、自分の意見を誰かにきかせたがっている実に多くの若者たちと出会った。イラク戦争へといたる続く数ヶ月、私たちはイタリア中の道の上を、数十万の群集からなる平和の行進をして歩いた。だが、それは何の役にも立たなかった。（p 4）国家の利益よりも自分の個人の利益により強い関心があることを、その国家運営のなかで顕示したシルヴィオ・ベルルスコーニ首相。彼のひきいるイタリア政府は世論の過半数の反対にもかかわらず、米軍のイラク占領部隊に追従する形で、「人道的作戦」を使命とするイタリア兵三千名をイラクに送り込んだ。つい先日、同イタリア兵のうち十九人がたった一発の爆弾で殺された。招かれざる国へ軍服をきた兵士として向かう者にはこれからもおなじことが、それがどのような形であれ、起こり続けるにちがいない。

平和のために語り合い・行進することは、本当になんの役にも立たなかったのだろうか。それは役に立ったのだ。数知れない若者たちのむねに一粒の種をまいたのだから。この非暴力の種はいつか花を咲かせることだろう。花咲かざるを得ないのだ、もし全人類が生きつづけたい、われわれが絶滅させてきた多くの生き物たちのように絶滅したくはないと望むのならば。

この点においてわたしたち全員が結束していると考えることから、まず始めてみよう。イタリア人も日本人もない、私たちはみんな人間なのだ。あなたたちがその美しい島々の上、他の仲間たちから少しはなれたところにいるという事実は、あなたたちを何ひとつ守ってくれはしない。なんらかの形で暴力に加担すれば、やがておなじ暴力があなたたちに

総司令官により任命された。

も降りかかってくることは間違いないのだ。

第二に、他人が決めつけた「敵」の定義を鵜呑みにすることはやめよう。敵をもたず、誰も憎まないようにしよう。そして消し去るべきものは敵対関係であり、敵自身ではないということを中心に銘じておこう。

この先、わたしたち自身が暴力の犠牲者となることもありうる。だが万一そうなったからと言って、非暴力の姿勢を変えてはならない。だれに対する憎しみも決して抱いてはならない。なぜなら、憎しみは新たな憎しみを生むだけだからだ。

ヒロシマ・ナガサキにアメリカのふたつの原子爆弾が投下されてまもなくのことだ。ガンディーに、もし同じようなことが彼に起きたら、非暴力をどこまでも信奉する彼はいったい何をしたらろうかと尋ねたものがあった。「原爆投下をしたパイロットに、いずれにせよ私は彼を憎んではないと言うことを理解させようとしたことだろう。」ガンディーはそう答えている。

非暴力はひとつのユートピアである。だからといって、絵空事を実現させるために私たちがあらゆる努力を払うことはないということではない。それに、我が日本の読者よ、あなたにはじつに多くのことが出来るのだ。あなたの国の歴史を振り返ってみるがいい、そこには廉直さ、忍耐、忠誠、理想主義のたいへん素晴らしい例がたくさんあることに気がつくはずだ。あなたの国の伝統においてこれらの質は、戦士の階級に関連づけられることが多かった。戦争というものが、正々堂々と対決するジェントルマンたちと刀からなる名誉あるものであった頃の話だ。そこであなたにはこれらのおなじ質を、いま非暴力の戦士となるために用いることが可能なのだ。非暴力を説く私のイタリア巡礼の終わり頃のことだ。スイスのテレビ局がそのドキュメンタリーを制作し、そのなかで、私のことをこう呼んだ「平和のカミカゼ」。わたしはこの名を誇りにおもう。

ああ、わが日本の読者よ。わたしはあなたの生活を少しばかり知っている。あなたの日々の仕事がいかにつらいものであるかも知っている。何時間も電車で揺られ、人工の明かりの照らすオフィスで長い時間働き、いつも狭い空間に暮らしていることも。だがこれは、

偉大な何かをあなたの人生にひとつ加えるチャンスなのだ。それが即ち、非暴力運動である。学び、読んでくれ。平和について考える人々と出会い、若者たちと語りあってくれ。あなたの国で偉大なる知恵のいくつかの頂点に達した仏教、その宗教的伝統にたちかえることだ。そしてなにより、歴史を忘れるな。(p 5) ヒロシマとナガサキが何であったかを振りかえり、同じことがあなたの国や他の国の人々の身にふたたび起こることをはたして自分が望んでいるか、自問してくれ。

捕らわれの身となったひとりのサムライが、親友と会う約束をまもるために自殺して果てたという物語が昔からわたしは好きだった。さて、数ヶ月のうちに、わたしもまた自分の肉体を去ることになる訳だが——遅かれ早かれ誰にでも起こることだ——後のページにつづく言葉たちがその後も反響し続けてくれるという事実をわたしは頼りにしている。なぜなら、実のところその言葉たちはわたし個人のものではなく、誰の心のなかにもあるものだからだ。それにひょっとしたら、日本や世界で平和のために働くわが友人たちと会う約束を守ることすら、私には出来るかもしれない。人生におこるすべては、偶然ではないのだ。

わが読者よ、あなたの人生の幸運を祈っている。

インド・ヒマラヤ 二〇〇三年十二月

本原稿の著作権は飯田亮介に所属します。

再配布や何らかの媒体での使用をご希望の方は、私の方にメール: info@ryosukal.comでお尋ね下さい。

Copyright (C) 2003-2004 Ryosuke IIDA, All rights reserved.